Fate/ONE ELSE

紅石奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／ＯＮＥ　ＥＬＳＥ

【Ｎコード】
Ｎ２２６５Ｚ

【作者名】
紅石奏

【あらすじ】
初投稿。「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ」の二次創作です。原作とは全く別の場所で、別の登場人物たちが行う聖杯戦争を描きます。長編です。時間軸としては、冬木の第五次から２０年くらい後。設定や世界観は同じですが、内容については読んでからのお楽しみ、ということで。

第一章　「帰国子女にご用心」

ヒュオオオ――――・・・
ビル風の吹き抜ける夜の街路地を、赤いコートの美女と黒スーツの男が歩いている。
美女と言っても、それはまだ成人前の少女。全体的に大人びた洋装で、後ろ髪の
ポニーテールを細いリボンで結んでいる。一方で男の方は、細身で背が高く、おそらく
日本人ではない。少女よりもずっと年上のように見える。
「ホテルの準備はできているかしら？　“シェイファーフント”」
「はい、お嬢様」
黒服の男が短く返す。二人はどうやら執事とその主（あるじ）といった関係のようだ。
足早に、どこかへ向かう。
これは、外気が一層寒さを増してくる１１月のできごとである。

◇◇◇

妙な夢を、見た。
西洋のお城のような場所に、甲冑で武装した人々がひしめいている。
それが人間なのか、それとも別の群れなのか。四方八方を怒号に囲まれ、
上下の感覚さえ失われた大混乱の中では、何もわからない。
――――戦争の、混乱だった。
ただひとつ、その群衆の中に光輝く旗が見えた気がした。
旗は赤く、金色の刺繍で模様が描かれていた。

俺は、その旗に見とれるだけの一人の傍観者だったかもしれない。
ふいに、一陣の強風が戦場を吹き抜ける。
そして感覚はさらにぼやけて、俺は現実に戻ることになるのだった。

ピピピピピピ・・・
「透ぅ！！　とーるー！！　起きてるんでしょ！？」
けたたましく鳴る目覚まし時計の音と、自分の名前を叫ぶ声が同時に聞こえた。
沢渡宛音。
幼い頃から隣家に住んでいる同級生の女子で、自然に同じ学校へ通いながら育った。
こういう話をすると男子勢から無闇に妬まれ、時に名指しで糾弾されるのが、近頃
では持ちネタのひとつになってしまっている。彼らにとって“異性の幼馴染み”という
存在は、憧れを通り越してもはや偶像の域らしい。ましてや宛音は、黙っていれば
そこそこの美人でもあるから、一時期は男子からの熱い視線を集める人気者だった。
「勝手に入るからねー！」
今でこそセミロングだが、かつての宛音は髪が長かった。人気の女子は、みんな髪が長い。
そうか、女子はロングヘアの方が可愛いのか。そう冷静に分析していた当時の俺は、男子
小学生としては異色の子供だったに違いない。
たいていの男は、中学生に上がると急に色気づく。自意識過剰になる。しかし女子はこういう
変化に対応できないか、あるいは俺たちよりずっと早くに精神的成長を済ませているらしい。

宛音も、互いが異性であることを憚らず学校で俺の名前を呼んだし、一緒に登下校した。
言うまでもなく、そのとばっちりで男子勢から敵意の視線を浴びたのは俺である。
そういうわけで、俺にはずいぶん長い間同性の友達ができず、夏休みなどは宛音たち
女子グループと遊んだ。
まるで姉妹だらけの家庭で育った長男みたい。
誰かにそう言われたけれど、それが嫌だったり、恥ずかしかった記憶はない。実際は
一人っ子だったから、兄弟だとか姉妹なんていう感覚自体がなかったのかもしれない。
宛音と俺とは、家族ぐるみで、それほどに親しい関係でもあった。
ちなみに。
俺の知るかぎり宛音に彼氏がいたことは、ない。
当人が人見知りなのもあるが、一度親しくなると、その気まぐれな性格に振り回される
という失敗を誰もが味わうことになるからだ。
女を、外見で判断するなかれ。
そもそもこの外見のどこに、内面を無視できるほどの魅力があるのか。
その点については、第三者に強く意見を求めたい。
「・・・果てしなく失礼なモノローグを聞いたわよ」
「空耳だろう」
俺は着替えを済ませてリビングに出ると、そこで宛音に出くわした。
こいつめ、勝手に中庭から入ってきやがったな。
改めて宛音を視界に入れる。
俺たちは二人とも高校二年生である。俺も宛音も、外見については
何ら特筆することのない
一般的な学生服。とりわけ宛音は完璧主義だ。今日もセミロングの

黒髪にしっかり櫛を通し、
身だしなみには一切の手抜きが見られない。
ただひとつ、ブレザーの背中にクリーニング店の小さいタグが残っている以外は。
「ちょっ！何なの！？」
「じっとしてろ」
ほら、と外したタグを手渡してやる。
「わ、やだー！」
朝から、実に賑やかだった。

学校へは徒歩で通学している。言い忘れたが、俺はこの桃寄町（ももせちょう）という程よい田舎町に、一人で暮らしている。父は他界。そして、父の実家と仲が悪かった母は、
彼女の実家に返されてしまった。一人息子である俺も一緒に、という意見と、いやいや
親戚の中で里親を募ろうという意見が真っ向から衝突していたけれど、俺は父と暮らした
この屋敷を、せめて学校を卒業するまでは離れたくないと主張し、
一人では少々贅沢すぎる
広さの家をこうして独占しながら今に至る。
もちろん嘘である。
実際、そんな感傷はこれっぽっちもない。
父が亡くなったのは、二年前。そういう事情もあって、お隣さんである沢渡家の人たち
には日ごろからお世話になっている。
「ねえ、透。」
ふいに、横を歩く宛音が話し始めた。
「なんだ？」
「お父さんがくれた剣、まだ持ってるよね？」
お父さん。つまり宛音の父親である沢渡幹広は、海外を長く旅して

いるパワフルな人である。
これも言い忘れたが、宛音の家系は四代までさかのぼる魔術師。魔術なんてものがこの国で
どういう扱いになるのかわからないけれど、聞いた話ではロンドンに“魔術協会”という団体が
存在し、現代で「魔術師」を名乗る人たちが洋の東西を問わず所属しているのだという。
宛音の父、幹広さんもそんな魔術師の一人である。
ずっと昔、まだ俺たちが小さかった頃に、幹広さんが二人に大小の箱をくれたことがあった。
たしかフランス土産とか言っていたように思う。欲張りな宛音は大きい方の箱を選び、俺は
小さな箱をもらった。開いてみると、中にはそれぞれ西洋剣が入っていた。宛音の箱には
大きくて色鮮やかな剣。俺の箱には銀製で地味な短剣。どちらも箱にしっかり固定されていて、
当時は取り出すことができなかったけれど、幹広さんは「大きくなったら役に立つことがある
かもね」と言っていた。
「ああ、まだあるよ。たしか・・・押し入れの奥に。」
「透の剣は地味だったもんねー。残念だね。」
宛音が勝ち誇ったようにニヤリとする。こいつは、ひょっとしてあの剣を家の中にでも飾ってる
のだろうか？
そもそも小さな頃の宛音が、「何これ？いらなーい！」と言って一度その箱を放り投げたのを
よく覚えている。まあ、放り投げようにも抱えるほど大きな箱だったから、宛音は反動で
よろけていたけれど。
「もうすぐ、始まるみたいだよ」

「は？何が？」
宛音は主語のない謎の文章を残して、この会話を唐突に終わらせた。
～Ｉｎｓｅｒｔ～
「聖杯戦争、だと・・・？」
今から３ヶ月前、まだ日本では真夏の時季である。都内にあるファミリーレストランで二人の
男性が向き合い、話していた。一方はしわだらけの茶色いシャツを
着た四十歳くらいの日本人。
もう一方は、同じくらいの年齢だが爽やかな青いシャツにサングラスの外国人だった。
「そうだ、トウゴ。間もなくこの国で、また聖杯戦争が始まる。」
外国人の男は、流暢な日本語で彼の質問に応える。
トウゴ、と呼ばれたその日本人は、フルネームを二条塔五という。
今は都内の大学で教鞭を
ふるう、比較的若くて人気の講師である。
「今さら教会が、こんな極東の田舎に何の用向きかと思えば・・・。
」
二条講師は、呆れたようにため息をついて言った。
「つれないな。我らが埋葬機関の中でも、“背徳の狼”と呼ばれた
元エージェントのお前に
会うというだけで、地球を半周するだけの理由にはなる。」
「よせよ、レオ。昔の話をするな。」
サングラスの男は、名をレオナルド＝フェレーロと言った。イタリア人である。右手には、
注文したアイスコーヒーのグラス。ストローを使わず大胆に傾けて
飲む。
「そう、昔の話だ。だからこそ、今のお前を見るに堪えない。そう
思って、今回は特別な
アイテムを持って来てやったんだぞ？」

「それはお前に任じられた仕事じゃなかったのか？」
「俺はあくまで監督役さ。マスターがもう一人増えたところで、何の問題もない。」
「・・・レオ、言ったはずだ。俺はもう――」
「おっと。気が滅入る思い出話はナシにしようぜ、トウゴ。」
レオナルドは右手で二条の発言を制する。
「お前は、これからもずっと、この魔術との関わりからは逃れられないのさ。」
～Ｉｎｓｅｒｔ　ｅｎｄ～

学校に到着して、クラスの違う宛音と別れると、俺は自分の教室に満ちた異様な空気を
感じて立ち止まる。
「針谷（はりがや）さん、だっけ？どこから来たの？」
「ドイツから帰国したばかりよ」
わー、きゃー、という黄色い声がドアの外まで溢れていた。何の騒ぎだ？
「この中途半端な時期に転校生、だそうだ、真島。」
教室に入り自分の席につくと、ひとつ後ろに座っている日野が解説しはじめる。
「何でもドイツから来たらしい。どうやら国家レベルの大きな陰謀が動いているようだな。
２号機の実戦投入も近いだろう。」
しかしその解説の半分くらいは、俺には理解できないものだった。
とにかく転校生、だそうだ。しかも美少女だった。ふと、興味本位でその子の方に
目を向けると――。
「・・・・・・ふ」
一瞬、目が合って、しかも笑いかけられたような気がした。・・・
いや、気のせいかもな。

しばらくの間は、女子陣が転校生の周りを囲んで質問責めにするだろうし、彼女のプロフィールについては、そのうち風の噂となって聞こえてくるだろう。
「真島。お前、まさかすでに彼女と知り合ってはいまいな？」
「そんな偶然は二次元の中だけの産物だ。」
ちなみに俺の名字は、真島と書いて「まさじま」と読む。珍しい読み方なのでよく間違われるが、俺個人は「ましま」と呼ばれても反応することにしている。
後ろの席にいるこの男の名前は日野俊明。休み時間などは、先生の目を盗んで持ち込んでいるポータブルゲームによく没頭している。
「がー！！なぜ隠しキャラでもないヒロインのエンカウント率がこんなに低い！？」
・・・・・・知らん。
こうして転校生の存在を半ばスルーしている俺たちを尻目に、クラス中の男子がそわそわと話している内容をかみ砕いて説明するなら、転校生が一体誰の隣に座るのか。これは、今後の学校生活へのモチベーションを大きく左右する、重要なファクターらしかった。

あっという間に放課後になり、俺はそそくさと部活動へ向かう。帰宅部だ。帰宅部とは、今さら説明するまでもなく家に帰ること自体が部の活動となるありがたい部活であり、顧問もいなければ部費もない。部員が何人いるかもわからないから部員名簿などあるわけもなく、もちろん休日に集まって練習もしないし、そもそも地区大会も何もない。

・・・誰か突っ込んでくれ。早く。
「つまり生産性のない生徒だな。」
「お前もな。」
同じ穴のムジナから、欲しくもない突っ込みが来た。

下駄箱に差し掛かったところで、見覚えのある茶髪のポニーテールを目撃した。宛音の髪型
ではない。それは、例の転校生の後ろ姿だった。
声をかけるべきか。
どっちでもいいような気がしたけれど、どっちでもいいことに一瞬迷っている自分がいる。
それは、わずかな興味の証だった。
「あら、こんにちは。・・・たしか、クラスメイトよね？」
俺が迷っている刹那、意外にも彼女の方から話しかけられてしまった。
背後にいたので気付かれないつもりだったけど、なぜかこの美女は俺の方へと振り返り、
今度こそ完全に、目が合った。
「あ、ああ。まだ個人的には挨拶してなかったな。えーと・・・」
「針谷聖良（せいら）よ、よろしく。」
「俺は、真島透。」
初対面ながら、威風堂々とした自己紹介である。日本人には珍しい、気さくな雰囲気。
針谷というその少女は、まっすぐこちらを見つめて手を差し出す。
握手だった。
「ドイツからの帰国子女って聞いたけど、日本は何年くらいぶりなんだ？」
「物心ついたときには、もうドイツにいたわ。だから正直に言うと、日本は今回が初めて
って感じ。何もかも新鮮よ。」

「そう・・・なのか。」
彼女の話す慣れた日本語からは、それもそれで意外に思える答えだった。
「ねえ、私も貴方に聞きたいことがあるのだけれど、いいかしら？」
「ん？どうぞ。」
その時、条件反射でそう応えてしまったことは、後から考えると失敗だったのだろうか。
いや、それはいくつもの失敗の積み重ねからそうなった事実であり、間もなく始まる
大きな事件の、ほんの序章にすぎなかったはずだ。
「――――貴方、魔術師よね？」

◇◇◇

真島透という人物は、ごく一般的な父親と、やや特殊な家系をもつ母親との間に生まれた、
ごく一般的な少年である。さっきも言ったように、父は他界しており、今は一人暮らしだ。
母は沖縄の出身。それも旧姓が久高（くだか）といえば、博学な方はお察し頂けるだろうか。
俺が昔、本人から聞いた話はこんな感じである。
「うちの“オバァ”は、島で有名なノロだった。ノロって言うのはね、神社の神主さん
みたいなものかな。沖縄では男の人じゃなくて、女が神様の儀式をするのよ。“おなり様”
とか“かみんちゅ”と言って、昔は島の誰よりも偉くて大事な役目だったけど、もう今の
沖縄ではほとんど無くなってるね。」
司祭。祝女。

いわゆる魔術師とは違うけれども、それなりに霊験ある家系らしかった。
父の親、つまり俺にとっては祖父や祖母にあたる真島の人たちは、魔術師を嫌悪している。
そのせいもあって、二人の結婚には苦労することが多かったらしい。
一方で、俺たち一家の隣に住んでいた沢渡家とは仲が良かった。とりわけ宛音は、父・幹広さんから教わった魔術の知識を、そのまま俺に嬉々として語って聞かせた。
そういうわけで、俺も多少なり魔術の心得がついた。
――ついてしまった。
周りに憚る気もないので言ってしまうと、俺が使える魔術は「身体強化」である。気持ちを集中すれば垂直６ｍくらいの高さを跳ぶことができるし、１００ｍを3秒台で走る。もちろん体育の授業でそんな能力は使わないけれど、町中を移動するなら交通機関を使うよりも自走した方が早い。その程度の、ささやかな魔術だ。それこそ、宛音に比べたら月とすっぽん。
小学生の算数と、素粒子物理論くらいの格差がある。
とはいえ、たしかに俺も魔術師の端くれだ。
ただし、本当に端くれ。その部分を何度も繰り返し、強調しておきたい。
能力が低いというだけではない。家柄として、そもそも魔術師を名乗っていない。

「恥ずかしがらなくてもいいのよ。――それとも謙遜？」
目の前の少女。今日会ったばかりの転校生が、そう言ってくすりと笑った。
「いや、恥も遠慮もないって。つか、俺よりもあんたの方が何者な

んだよ？」
「聖良よ。『あんた』じゃなくて、聖良。『君』とか『お前』っていう呼び方もお断りするわ。わざわざ名前を言った意味がないもの。もちろん私も魔術師。端くれじゃないわよ？」
・・・さいですか。
魔術師。
そんな奇抜すぎる自己紹介を、奇想天外な話題を、さらりと聞き入れる人間は少ない。
どうやら思わぬところで、ご同類に出会ってしまったらしい。
「そう、やっぱり魔術師なのね。ふーん。・・・透くん、って言ったかしら。それじゃあ、
『聖杯戦争』については、ご存じ？」
「待った。そう矢継早に質問するな。あんたは・・・えーと、針谷・・・さんは、そもそもなんで俺が魔術師だと思ったんだよ？」
「カンタンよ。」
そう言って、彼女はすっと俺を指さした。
「聖杯戦争のマスターともなれば、相手が持っている魔力量を目算するのなんて基本だもの。」
「マス、ター・・・？」
「知ってるのよね？いいえ、知らなければ私が教えてあげる。ねえ、透くん。真島透くん。
この聖杯戦争で、私の手伝いをしてくれないかしら？」
「・・・・・・・・・は？」
思考が、停止した。
本能で思う。この女は、目の前にいる美女は、きっと関わってはいけない相手だ、と。
「透・・・？」

その刹那、ほとんど間を置かずに、別の方向から名前を呼ばれた。
「何やってるの？」
それは聞き慣れた、宛音の声だった。
俺が振り向いて口を開こうとする前に、宛音は俺の腕を取って足早に歩き始める。
「帰ろ」
小さく、短くそう言った。
すぐ側にいる針谷聖良を無視するかのように――――。
一瞬、宛音のそんな行動が彼女の感情を逆撫でするんじゃないかと思ったけれど、その時
の俺は宛音に連れられるまま、学校を後にした。

「あの人、誰？」
帰り道。
宛音が、当然の質問を俺に投げてくる。
あの人、というのは、当然ながら針谷のことだろう。
「うちのクラスの転校生だ。今日初めて来たんだよ。」
「なんでそんな人と、透が話してんの？」
――答えにくい質問だった。
俺はクラスの委員長でも保健委員でもないから、転校生の世話をする立場ではないし、
そもそも話しかけてきたのは針谷の方だから、話していた理由も内容も、俺の知るところ
ではない。
聖杯戦争、と言っていたか。
宛音も魔術師なのだから、彼女が魔術師だということを話すのは、やぶさかではない。
けれど「戦争」という物騒な単語を、明らかに意図ありげな針谷聖良の態度を、宛音に
どう言って聞かせるべきか迷った。

いや、むしろ隠さずに言ってしまえば――――
俺も宛音も、聖杯戦争というものが何なのか、とうの昔から、よく知っているのである。

◇◇◇

「透っ！見て見て！」
中学一年生の頃だったか、宛音がものすごく物騒な武器を持って、我が家を侵略しに来たことがある。
「おまっ・・・！　それ何持ってるんだよ！？」
「ふっふーん！　透も前にもらったでしょ？　お父さんから。」
それは、宛音の父・幹広さんがくれた箱の中に入っていた、あの西洋剣である。
ただし宛音のそれは、ＲＰＧの主人公が持っていそうな中でも、終盤の強い敵を倒せるくらい立派で豪奢な大剣だった。
宛音はそれをひょいとひっくり返し、地面に突き立てて両手を添える。
「どう？　セイバーみたい？」
セイバー。剣使いのサーヴァント。幹広さんの蔵書の中から見つけた、聖杯戦争の記述に出てくる七騎のうちの一人であった。
「セイバーは女じゃないだろ。」
「えー。前に召喚されたセイバーは小柄な女の子だったって聞いたよ？」
「そんなセイバーがいるかよ・・・。」
「アーサー王。」
「バカ、アーサー王は男だよ。」

「そんなのファンタジーの話でしょう？」
「いや、アーサー王自体がファンタジーの中のキャラクターだから。」
俺はためしに、俺の知っている伝説のアーサー王を、頭の中で女性化してみる。
――――筋肉ムキムキのメスゴリラになった。
「なんで笑ってるの？」
「・・・いや、何でもない」
聖杯戦争とは、文字通り、聖杯をめぐる魔術師同士の戦いのことを言う。ただし、その
戦争で実際に戦い合うのは、人間同士ではない。聖杯戦争では、その期間中において特別に
『英霊（サーヴァント）』という戦士が召喚されて、戦いの担い手となる。
そのサーヴァントを使役する魔術師のことを、それぞれの『マスター』と呼ぶ。
サーヴァントの数は、合わせて七騎。
セイバー。
ランサー。
アーチャー。
ライダー。
キャスター。
バーサーカー。
そして、アサシン。
七人のマスターが、それぞれ七騎のサーヴァントをぶつけ合って覇を競う。それが、
聖杯をめぐる戦争である。
「これ、たぶん『セーイブツ』って言うんだと思う。古そうな剣だからね。」
宛音が剣を眺めてそうつぶやいた。

「誰の聖遺物だよ？」
「わかんない。」
「・・・召喚できるとしたら、まず間違いなくセイバーだろうな。」
「透のは？　透のも剣だったでしょう？　これより細いけど。」
「うーん・・・何だろうな。・・・アサシン、かもな。」
もしそうだとしたら、なんか宛音に負けた気がして癪だった。
「ねえ、もし聖杯戦争で私が勝ったら、透を私のお婿さんにしてもいいかな？」
「・・・・・・逆に俺が勝ったら？」
「私をお嫁さんにしてもいいよ。」
「それって、どっち道同じことじゃ・・・」
小学生に毛が生えたような子供だった俺は、それがどういう意味なのか考えることも
しなかった。ただ、それまでミニスカートなんか穿いたことのない宛音の制服姿が、妙に
新鮮だなあ、と。そんなピント外れなことを、考えていた。
「じゃあ約束、ね？」

◇◇◇

「あの人、『聖杯戦争』って言ってた。」
「・・・聞いてたのかよ？」
「透は、何か感じない？　家に帰ったら、あの剣を出してみてよ。」
宛音は俺の質問を見事にスルーして、また趣旨の見えない謎のセリフを吐いた。
あの剣を、出す？
宛音の剣が聖遺物だったとしたら、俺の剣も同じかもしれない可能性が出てくる。
それはつまり――――。
「まさか・・・。聖杯戦争が始まるって言うのか？」

「そう。」
そう、って・・・。
「これから、聖杯戦争のことを知ってる人に会ったら、それが誰だとしても、気をつけた方がいいよ。」
「宛音。お前、やっぱりセイバーを召喚・・・したのか？」
「これからよ。」
切迫した宛音の表情から、これが冗談の話ではないことがわかった。もし、そうだとしたら。昔語りに聞いた聖杯戦争が、今現実に起きているとしたら――。

『聖杯戦争のマスターともなれば・・・』

針谷のあの言葉は、つまり、もうすでに、少なくとも一騎のサーヴァントがこの町で召喚されたことを意味している。
針谷聖良は、マスターなのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2265z/

Fate/ONE ELSE

2011年12月8日01時59分発行